

危機救ってくれたパラシュート

昭和六年六月十日未明、父（政夫の義父）の経営する煙火火薬庫が自然発火で大爆発を起こし、それまでつくりためていた打揚げ花火の製品を全部焼失してしまった。その結果、夏の花火のシーズンを迎えても売る花火も無い。そこですぐ金になるものは何か、と考えふと気がついたのが、目の前にあった割物の残光用に使う直径十センチほどのパラシュートである。これを筒に入れて打ち出す玩具花火をつくったら売れるかもしれないと考え、さっそく試作したのであった。まず雁皮紙そのままのパラシュートでは子供が喜ばないだろうと思い、色をつけ、直径一センチの筒に粘土底を設けて火薬一グラムを入れ、綿の実を充填してその上にパラシュートをたたみ込んで入れ、筒の外から火薬を点火するようにした。きわめて簡単なものだったが、試験したところ三、四メートルも高く上がるものもあった。問屋にみせたら買ってくれるだろうかと心配しながら東京蔵前の山縣商店に見本をさつそくもっていった。山縣さんはこれを見て、「たいへん面白い、一万本製造してくれ」ということで、驚いたことに手金として百円を渡してくれたのであった。そこで父に玩具花火をやりたいとそれまでの経過を話したが、父は玩具花火をやることに賛成してくれなかった。「やるならお前やれ。オレは玩具花火などいっさい関係しない」ということで全部私がやることになった。

不景気な時代だったので人手はいくらでも集まり、またパラシュートの糸付けや筒巻きは内職を利用し、一万本の注文は一月足らずでおさめることができた。そして非常に売れゆきがよく、追加注文として五万本を頼まれたのだった。当時五オンスのボール紙一トンを四十五円で仕入れることができ、パラシュートの紙も六枚取りで一枚二銭くらいのときであったので、一本三銭のパラシュート花火も相当な利益がある勘定であった。ところが当時の父の考え方は、「打揚げ花火は大名の道楽だ。駄菓子屋に売ってもらおうような玩具花火をつくるのは乞

食商売だ」であった。武士は食わねど高楊子を気取ってか玩具花火のことには関心はなかったのである。

翌年は打出し筒の中に入る内筒をつくり、その中にパラシュートを入れ、導火線を着けて発射すると二、三十メートル昇ってからパラシュートが放出されるようにした。またパラシュート花火の底部の粘土をコルク栓にかえ、クリスマス・クラッカーに使うような糸引雷管の糸をコルク栓を通じて下に出しておき糸をひくとその雷管が発射薬の中で発火し、発射とともに爆発してパラシュートが入っている中管が発射されるようにした。引玉（糸引雷管）の爆発がクリスマス・クラッカーと同じでは発射薬に点火しないので、爆薬の配合率をかえてやってみるなどいろいろ試した結果、爆薬の配合中に、硫化アンチモンの比率の多いのが発射に火つきが一番よいことがわかった。さらに筒を片手でしっかり握りもう一方の手で引糸をひくため万一にも筒が弱くて破れるようなことがないように外筒の強度も強くした。これをナンバ7と名づけたが、輸出用にもだいたい注文があった。さらに工夫をこらしたものがパラシュートのおもりにしていたセメントを色星にしたもので、空に放出されると色星に点火してパラシュートに吊るされて十秒くらい燃える花火であった。

去る昭和五十三年、私は日中玩具煙火友好視察団の一員として中国煙火製造所を見学する機会を得た。そして湖南省の花火工場をみて驚いたことに、何百人もの従業員がほとんどパラシュート花火をつくっていたのである。なかには私の工場でつくったものと同じのももあったし、三個のパラシュートが飛び出すものもあった。いま、日本国内に巡回しているパラシュート花火のほとんどは中国産だが、これでは低賃金の中国にかなうはずがないと感じたものだった。